国の重要無形文化財認定へ
～十四代今泉今右衛門さん

平成 26 年 7 月 18 日、国の文化審議会文化財分科会での審議・決定を経て、赤絵町在住の十四代今泉今右衛門さんを国の重要無形文化財（いわゆる人間国宝）に認定するよう、文部科学大臣に答申されました。

十四代今右衛門さんは昭和37年12月30日生まれ、51 歳という陶芸の分野では最も若くして、色絵磁器の分野での保持者となられますが、これから開く個展や重要無形文化財保持団体の作品展を控え、多忙な中にお話を伺いました。

先代の父からは高校一年生の時、これからどうするかは自分で決めるようにといわれ、さらに祖母からの「兄弟で一緒に窯場の仕事が出来たら」という言葉が美術大学への進学を決めた要因だったそうです。また、大学で金工を専攻したのは素材感へのあこがれがあり、このころの現代彫刻の考え方が、後の既成の価値観に対し横や斜めから見る視点に繋がったそうです。

大学卒業後は福岡市のニックに入社。3 年間のサラリーマン生活の後、現代彫刻・現代陶芸へのあこがれの思いで、京都の鈴木治先生に弟子入りされました。このころまでは手仕事を残す意味があるのかと自問自答する生活だったそうですが、これらの経験が家に帰る決心をさせたということでした。

色絵薄墨墨はじき柘榴文蓋付瓶

その後、平成 14 年に先代逝去後十四代を襲名されましたが、それについては生前の父や兄と話し合いをし、先代は二人で決めるように言われたそうです。その結果、兄は販売を、弟である自分が制作にあたることに決まったということでした。

しかし、襲名後の作品展のための制作をしていた時、墨はじきと色絵との組み合わせなど、自分らしいものをと思って作った作品の焼き上がりを見ても、どこかしっくりいかないと悩まれました。これは先代と違う作品を作らねばという焦りがそうさせたようで、感動する心ではなく理屈で作っていたと。それを見たある評論家の方から「こんな作品を出しちゃいかん」と厳しい意見をいただき、また柴田明彦さんからは「十四代を襲名するということは色鍋島を継承することを意味しているんですよ」という、ある意味相反する意見を言われたそうです。こういう多くの助言や制作の依頼などにより、新しい美意識が積み上げられ、作風も変わって来たとのことでした。

手仕事を残す意味も薪窯焼成や釉調のすばらしさを経験することで、考え方も変わっていき、有田とは、工芸とは、焼き物とはという自問を重ねていくことで、十四代という立場で自分らしい仕事ができるようになってきたとのことでした。

この度の認定を受けるにあたり、急に変われるものではないが、積み重ねの中で気が付き、教えられるもの、見つかるものもあるのではないかと。文化庁からも今の作品作りに安住することなくチャレンジすることを期待していると伝えられたそうです。ものづくりは次の一歩を踏み出す勇気がいるが、先人や素材、歴史に感謝しながら研鑽を積んでいきたいと抱負を述べられました。

（尾﨑　葉子）

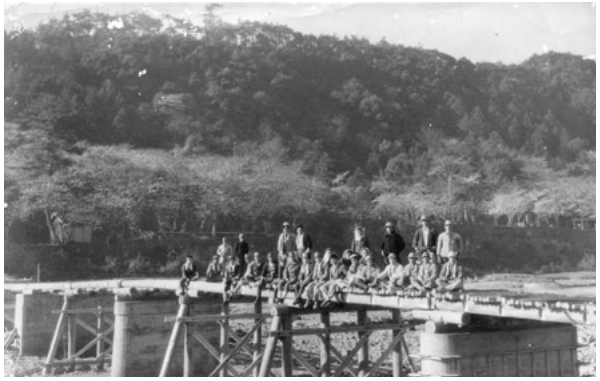
季刊 皿山 No.103 秋 2014
有田町歴史民俗資料館・館報

山下哲さん提供

上の写真は、明治22年に初代有田町長に就任した、平林伊平の次男芳次郎と、その弟の直です。平林伊平に関しては、肖像はあるものの写真はありませんでしたが、今回子孫の方より、伊平の家族の写真を提供して頂きました。

水害

近年の有田町の大きな災害として、「23水」と「42水」が挙げられます。それぞれ昭和23年、昭和42年に起こった大規模水害ですが、左の写真のような災害時の様子や、復興の様子の写真が残っています。



23 水後の丹後橋修復工事をする下山谷の人々
（梅崎一秋さん提供）

42 水時の丸尾地区の様子（猪股将儀さん提供）

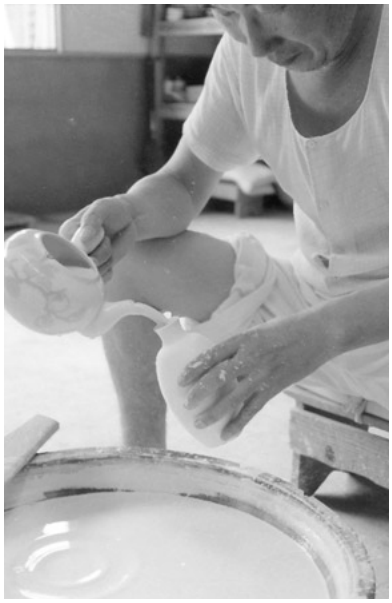
風景

左の写真は、山田神社側より撮影した、松浦鉄道と山谷地区の様子です。

横尾冨枝さん提供

窯業

今回も、陶器市や作陶の様子など、たくさんの窯業の風景が集まりました。左の写真は柿右衛門窯の施釉の様子（昭和40年）です。



照井一玄さん提供

大串忠弘さん提供

平成26年度企画展
『なつかしの有田 PART II』

西有田会場

会期
平成26年10月1日
～10月20日

場所
有田町庁舎町民ロビー

入場無料

有田会場

会期
平成26年11月1日
～11月30日

場所
有田町歴史民俗資料館
東館

会期中入館無料
※10月は常設展を展示しています（有料）。

イベント
・11月23日・24日
夜間開館と紅葉ライトアップ（18時～20時）
・フィルム上映会

有田町は平成18年に旧有田町と旧西有田町が合併し、新しい「有田町」が誕生しました。そこで今回の企画展は、新たに町内外の方々に呼び掛けて提供して頂いた、旧両町に関わる、明治から平成までの、なつかしいふるさとの写真を展示します。

また今回は、たくさんの方の目に留めて頂きたいという思いから、有田町歴史民俗資料館東館だけで展示するのではなく、有田町庁舎町民ロビーに西有田会場を設け、会期を分けて展示開催することとしました。

この館報では企画展に先駆けて、展示作品を少しだけご紹介したいと思います。企画展が始まりましたら、ぜひ両会場に足を運んでいただき、自分のお気に入りの一枚を探して下さい。

祭

有田町内の神社や祭礼の様子を紹介します。

上の写真は、上幸平天満宮での「山王祭」の様子です（昭和31年か）。

写真の左上部に窯の煙突から立ち上る煙が見えます。

人物

篠原恵美子さん提供

西有田村青年農村建設班

昭和30年に農林省が決定した「新農村建設総合対策」を受け、西有田村で昭和34年1月16日に「西有田村農村青年建設班」が発足し、農業技術の習得と協同精神を学びました。

その農村建設班の第1期生と、翌35年の2期生の活動の様子を記録した写真が残っています。

当時の佐賀新聞によると、第1期生は大山公民館を隊舎に合宿しています。班員は村内より希望者を募り、大山地区20名、曲川地区の5名の18～25歳の青年25名。補導員として東京で研修を受けた二ノ瀬の川原一義さんを中心に、2ヶ月間村内の農業振興事業に活躍し、村民から称賛を受けました。

道路整備

左の写真は、「都市計画道路岩崎・穂波ノ尾線」が出来る前の風景です。

中央から右に延びる建物は岩尾磁器工業（株）です。

歴史の川ざらい開催しました

平成 26 年 8 月 2 日（土）、台風 12 号が近づく中、また前日から降り続く雨の中で「川ざらい」を開催するか否か、大変苦慮しましたが、川の様子を見て実施を決定しました。

この取り組みは今年で 3 回めとなります。有田の中を流れる川には、捨てられたり流れ込んだりして堆積している江戸時代からの陶片（ベンジャラ）が残っています。それを採集し、その場で当館の学芸員がいつごろ焼かれたものか、元はどういう形、用途だったかを答えるという形で進めています。

岩谷川内の白川川で今回も 10 人の子どもたちと 4 人の保護者、そしてれきみん応援団も 9 人参加していただき、安全面もしっかり確保して実施しました。中には 350 年ほど前に焼かれた陶片を見つけ出した子もいて、皆の歓声が川の中からあがりました。

ただし、これら陶片は貴重な文化財でもありますので、子どもたちは持ち帰ることはできません。後日、その陶片が持つ情報をまとめて子どもたちに届けるということで、有田の歴史を再認識してもらおうと取り組んでいる事業です。

今回は、川底などに残るハマ（窯道具）を投げて川面を走らせる「ハマ投げ」の遊びもしましたが、保護者の方の見事な腕さばきに、これまた歓声の声があがっていました。

今回の参加者

大山小学校　廣麻結さん、廣莉子さん

曲川小学校　藤田宗佑くん、空閑朱々菜さん、空閑羽功人くん

有田中部小学校

松尾雄伊くん、松尾結佳さん、篠原菜々子さん、篠原日奈子さん、篠原優太くん

有田の町屋模型作り教室開催

今回で 14 回目となった「有田の町屋模型作り教室」を 8 月 18 日（月）、19 日（火）の 2 日間にわたって開催しました。有田町役場東出張所の 2 階を会場とし、模型を作る前に、近くの伝統的建造物群（町並み）地区まで歩き、現地で担当者から町並みの歴史など説明を受けました。

毎回、定員オーバーとなるほどの応募がある人気の教室ですが、今回も 12 人の参加者でした。まず、基本となる江戸時代の町屋 1 棟の模型を皆で作り、その後は、数種類の中から好きな建物を選んで作り上げていきます。２日かけて町並みが出来あがるのですが、他にもトンバイ塀や橋など、子どもたちが自由な発想で完成させていきました。

川ざらいもそうですが、この模型作り教室も有田の子どもたちが、ふるさとの宝、歴史を体感してもらう機会となったらいいなと思います。

今回の参加者

有田小学校　金ケ江ひとみさん

有田中部小学校

大串宥翔くん、西山蓮さん、岸川武蔵くん、池田達也くん、川原凛さん、駒田早希子さん、駒田龍之介くん、下野帆波さん

大山小学校　廣麻結さん、廣莉子さん、梅崎百花さん

季　刊　『皿　山』

通巻 103 号（平成 26 年 9 月 1 日）

編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1

☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185

URL：http://rekishi.town.arita.saga.jp